

クナーラ王子の物語  
—Ku-na-la'i rtogs pa brjod pa 試訳(1)—

岡本健資

はじめに

以下に和訳を試みるのは、Ku-na-la'i rtogs pa brjod pa と名付けられる仏教説話である。この説話は、有名なアショーカ王の息子、クナーラ王子の物語のチベット訳である。

クナーラ王子の物語のサンスクリット原典、『ディヴィヤ・アヴァダーナ』(Divyāvadāna、以下 Divy) 第 27 章の「クナーラ・アヴァダーナ」(Kunālāvadāna) については、既に岩本裕氏、定方晟氏、John S. Strong 氏による訳が存在し、解題も付されている。一方、チベット訳については、諸研究者により言及はなされるものの、その内容についてはこれまで明らかにされていなかった<sup>(1)</sup>。そこで、ここに和訳を試み、その内容を明らかにしたい。

チベット訳における物語の趣旨や流れは、サンスクリット原典及び漢訳と一致するが、クナーラ王子の誕生に際して催される祭りの描写や、クナーラ王子が眼を失い、

---

<sup>(1)</sup>最近の研究では、松村淳子氏によるものがあり、漢訳、Tib.、Skt. を含めたクナーラの物語についてのこれまでの諸研究が網羅されている(「ジャイナ所伝のクナーラ物語」『佛教研究』14, pp. 63-88)。また、氏はその中で、チベット訳について「詳しい研究は未だない」としながらも、「『王経』程 Div に近接性を示さないが明らかに Div 系で、『王経』と『王伝』の中間的位置を占める」とする。氏が Tib. の内容を検討する際、参考とする研究は以下の通りである。

S. K. Mukhopadhyaya, ed., *The Aśokāvadāna: sanskrit text compared with chinese versions*, p. lix; de Jong, (*IJ* 8(1965), pp. 238-9=*Buddhist Studies* 350-1; *IJ* 12(1969), p. 271=*Buddhist Studies* 341)。

後にその眼が復活する理由を説明する過去世の因縁物語等、サンスクリット原典や漢訳に存在しない箇所が多く見られ、それぞれの版と比較、対照し、物語の変遷を推測する際の資料として価値を有する。そこで、各々の版を比較対照する前段階の作業として、チベット訳からの和訳を試みる。今回は物語の前半部分の訳出を行う。

この説話では、アショーカ王の息子クナーラが、その両眼の美しさと容貌の素晴らしさの為に、継母から誘惑を受ける。王子はこれを斥けるが、その為に継母の怒りをかう。継母はその仕返しに王子の両眼を抉る計画を謀る。計画は成功し、王子は両眼を失うが、それを機会に真理を現証する。これら一連の出来事の由来を比丘達がヤシャス長老に問い、長老はクナーラ王子の過去世物語によって、これらの出来事の由来を説明する。以上が、この説話の概要である。

この説話は、クナーラ王子のなした行為を語るものであるが、王子とともに父であるアショーカ王のなした行為にも多く言及がなされる。また、この説話では、ヤシャス長老なる人物が説法等を行い、他の説話における釈尊の役割を果たしている点などが特徴的である。この説話の中心テーマは、他のアヴァダーナと同じく善因楽果・悪因苦果という業報思想を説くことである。クナーラ王子の美しい両眼が奪われた原因を、王子が過去世においてなした悪業に求める点などは、その典型である。一方、クナーラ王子の真実語による両眼の復活は、業報思想というよりは、インドに古来認められきた、言葉自体の持つ神秘性を示すものである。この様に、この説話は、様々な要素を含みつつ、釈尊のいない時代の在家の仏教徒の在り方を我々に提示する。

## 翻訳に際して

翻訳には、北京版と台北版とナルタン版との三版を校合したものを底本として用いた。この説話が収められている箇所は、三版ともにテンギユルの律疏部 ('dul ba'i 'grel pa) の中に見出される。この説話は、その律疏部の終盤に収められている。この律疏部は、その名の通り、殆どが、『波羅提木叉經本疏』をはじめとする律関連の文献からなっている。その内、クナーラ王子の物語及びその前後の文献のみが、以下の様にアヴァダーナの名を冠している。

- gser-mdog-gi rtogs-pa brjod-pa. (Suvarṇavarṇāvadāna : 金色阿波陀那)
- ku-na-la'i rtogs-pa brjod-pa. (Kuṇālāvadāna : 鳩那羅阿波陀那)
- 'phags-pa dga'-ba'i bshes-gnyen-gyi rtogs-pa brjod-pa shes-bya-ba.  
(Ārya-nandamitrāvadāna-nāma : 聖歡喜友阿波陀那)

- gzhon-nu-ma bdun-gyi rtogs-pa brjod-pa. (Saptakumārikāvādāna : 七童女阿波陀那)

このようなアヴァダーナの一群が律疏部に収められた理由は、Divy の第 1 章、Koṭīkarṇāvādāna が、律を制定する際の事例として、根本有部律、十誦律に収められていること<sup>(2)</sup>と同じ理由であると考えられる。すなわち、これらのアヴァダーナが律の制定の際の事例として考えられたため、律疏部という範疇に収められることとなったのであろう。しかし、ku-na-la'i rtogs-pa brjod-pa に限って言えば、律の制定に関する記述は見られない。従って、先に挙げた理由は、俄にこの説話に適用されるものではない。この問題については、Divy 中の他のアヴァダーナのチベット大蔵経における所在とともに更に検討を要する問題である。

翻訳の際に使用したテキストと、引用または参考とした資料を以下に挙げる。

#### 【梵文原典】

- *The Divyāvādāna: Collection of Early Buddhist Legends*, edited by E. B. Cowell and R. A. Neil, Cambridge, 1886; Reprint Delhi: Indological Book House, 1987, pp. 405.16-419.13.
- *The Divyāvādānaṃ*, Buddhist Sanskrit Texts no. 20, edited by P. L. Vaidya, Darbhanga: Mithila Institute, 1959, pp. 260.29-271.28
- *The Aśokavadāna: sanskrit text compared with chinese versions*, edited by S. K. Mukhopadhyaya, Delhi: Sahitya Akademi, 1963, pp. 105-125.

#### 【蔵訳】

- *The Tibetan Tripitaka*, Peking Edition, No. 5646, U 281a1-299b6..
- *The Tibetan Tripitaka*, Sde-dge Edition, No. 4145, Su 227b3-240a4.
- *The Tibetan Tripitaka*, Snar-thang Edition, No. 3577, U 255b7-270b4.

#### 【漢訳】

---

<sup>(2)</sup>Divy と律典との関連については、以下の論文において言及がなされている。平岡聡「『ディヴィヤ・アヴァダーナ』と根本説一切有部毘奈耶」『仏教文化研究』40, pp. 9-22; 松村恒「西藏語訳律蔵における水平化の問題」『日本西藏学会会報』40, pp. 11-17; 同「聖典分類形式としてのアヴァダーナの語義」『インド思想と仏教文化』, 春秋社, 1996, (左) pp. 257-287.

- 『阿育王傳』 卷第三 (大正 50, No. 2042, pp. 108a4-110b9)
- 『阿育王經』 卷第四 (大正 50, No. 2043, pp. 144a9-147c6)

#### 【翻訳】

翻訳については、サンスクリット原典からの翻訳しか存在しない。和訳が岩本裕氏と定方晟氏により、英訳が John S. Strong 氏によりなされている。

- 岩本 裕 『仏教聖典選 第二巻 佛伝文学・佛教説話』 東京：読売新聞社, 1974, pp. 354-378.
- 定方 晟 『法蔵選書 9 アシヨーカ王伝』 京都：法蔵館, 1982, pp. 104-136.
- John S. Strong, *Legend of King Aśoka: A Study and Translation of the Aśokāvadāna*, Princeton: Princeton University Press, 1983, pp. 268-286.

#### 【関係資料】

今回の翻訳では比較対照を行わなかったが、今後、チベット訳と対照する必要がある資料を以下に挙げる。

- 『阿育王息壤目因縁経』 (大正 50, No. 2045, pp. 172b-183a)
- Kuṇḍālāvadāna, in *Avadānakalpalatā of Kṣemendra* (vol. II), Buddhist Sanskrit Texts, no.23, edited by P. L. Vaidya, Darbhanga: Mithila Institute, 1989, pp. 346-367.
- *The Kunala Legend and an unpublished Asokavadanamala*, edited by G. M. Bongard-Levin and O. F. Volkova, Calcutta: Indian Studies, 1965.

<略号>

P: The Tibetan Tripitaka, Peking Edition

D: The Tibetan Tripitaka, Sde-dge Edition

N: The Tibetan Tripitaka, Snar-thang Edition

CN: Divyāvadāna, edited by E.B.Cowell and R.A.Nail

『伝』: 『阿育王伝』

『経』: 『阿育王経』

訳文中で、ゴシック体となっているのは、サンスクリット原典と対応する部分である。

訳文中の [ ] 内のナンバーは北京版のものである。

## &lt; ku-na-la'i rtogs pa brjod pa 和訳 &gt;

[ 281a1 ] サンスクリット語では、Kunālavādānaṃ、チベット語では、Ku-na-la'i rtogs pa brjod pa。一切の諸仏・諸菩薩に帰命し奉る。

クナーラのアヴァダーナにおいて、この様に、アショーカ王の時代を三つに分けた場合、彼は、最初の時代には、欲望のアショーカであった<sup>(3)</sup>。次の時代には、恐ろしきアショーカであって、彼(アショーカ)は、美しい牢獄<sup>(4)</sup>を作り、多くの人々の命が失われた。三番目の時代には、法のアショーカとなった。彼は八万四千のダルマラージカー<sup>(5)</sup>を建立し、開眼した。

さて、その[ダルマラージカーの建立と<sup>(6)</sup>]同じ日に、アショーカ王の妃パドマヴァティー<sup>(7)</sup>は男の子を生んだ。彼女から、端正で、美しく、見目麗しい男の子が生まれたが、彼の眼は非常に美しかった<sup>(8)</sup>。

<sup>(3)</sup>山崎元一氏は、ターラナータ所伝のアショーカ王の伝説に言及する際、以下の記述を挙げる。「アショーカは登位後にヒンドゥー教聖者や女神を信奉し、また数年にわたり享樂的な生活を送ったため、カーマ = アショーカ(愛欲阿育)と呼ばれていた」(山崎元一『アショーカ王伝説の研究』春秋社、1979)、p. 49f.

<sup>(4)</sup>アショーカ王は、ギリカという名の獄吏の求めに従い、「樂しき牢獄」(「愛樂獄」『伝』 p. 101a25) と呼ばれる、外側は麗しく、内側は地獄のような牢獄を建設し、自分の気に入らない者達を殺害していた。後に、アショーカ王が仏教に帰依すると、その牢獄は彼自身の命令によって破壊された。

<sup>(5)</sup>この「ダルマラージカー」にあたる語は、Tib. の chos kyi rgyal po pa (P. 281a4; D. 227b4) であり、Skt. における dharmarājikā (CN p. 405.16, 以下、Skt. の頁数を挙げる場合には、CN の頁数を挙げる) によく一致する。漢訳では『経』が「塔」(p. 144a9) と訳している。『伝』ではダルマラージカーの建立とクナーラ王子の誕生とを関連づけない。以上の様に、クナーラ王子の誕生を八万四千塔の建立の日だとすることは Tib. と Skt. 及び『経』に一致する。また、アショーカ王による五年一大会 (pañcavārṣika) の開催に際してクナーラ王子が登場することを、Skt. (pp. 403.8-405.15) と『伝』(pp. 105c-106a) と『経』(pp. 140c-141b) とが記述する。Skt. では、五年一大会は八万四千塔建立に先行することになっている (p. 405.11-15) ので、クナーラの誕生が八万四千塔の建立の日であるとするのは時間的に矛盾することになる。

<sup>(6)</sup>Skt. では、yasmin eva divase rājñā aśokena caturaśītidharmarājikāsahasraṃ pratiṣṭhāpitaṃ tasminn eva divase rājño 'śokasya padmavatī nāmnā devī prasūtā / 「アショーカ王が八万四千のダルマラージカーを建立したその同じ日に、アショーカ王のパドマヴァティーという名の妃は子を産んだ。」(p. 405.16-18) という文章になっているので、語を補った。

<sup>(7)</sup>『伝』では「蓮花」(p. 108a4) 『経』では「鉢摩婆底」(p. 144a10)

<sup>(8)</sup>誕生時の王子の描写は、『伝』では「面貌端正其眼最勝」(p. 108a7) と大臣が語ったことになっている。『経』では「形色端正眼為第一。一切人見無愛樂。」(p. 144a11) と表現される。

そこで、ある家来が、王宮にやって来て〔アショーカ王に〕述べた。  
 「陛下、あなたに王子様が御誕生なされましたので、どうぞお喜び下さい」〔と〕  
 王は〔とても喜んで<sup>(9)</sup>、次の様に〕語った。

「今日、私は非常な喜びを得た。勇者の家系の名声は高まった<sup>(10)</sup>。〔私が<sup>(11)</sup>〕法  
 によって王権を繁栄させるときに、生まれた息子が法の増大を進めんことを<sup>(12)</sup>」  
 〔と〕

そうして、かのアショーカ王によって誕生祭が催された。パータリプトラ市全体に  
 水を撒いてきれいにして、〔大きな〕石と小さな石〔281b1〕と砂利とを取り除き、〔ま  
 た、〕木片と瓦礫と汚物とゴミの堆積物を除去してから、旗や花の飾りを掛け、付け  
 て、香炉から香りを薫らせ、家屋と通りと十字路と三叉路とを装飾した。すなわち、  
 綿、絹、美しいリンネル、絹布、葛の布、大綿布等を付けたのである。

また、〔人々は、〕房の付いた飾り、美しいプレスレット、腕飾り、ネックレス、胸  
 の瓔珞、真珠の輪飾りを付けて、小鈴、水晶の宝珠、太陽石等と、大きな宝珠のイヤ  
 リングとを身に付けた。また、青旗、黄〔旗〕、赤〔旗〕、白〔旗〕や黄赤色の〔旗〕  
 を家屋に立てた。また、綿布の天蓋や絹の天蓋で飾られ、パータリプトラ市全体がガ  
 ンダルヴァの王の住処と同じ様に整えられた。

〔また、〕パータリプトラとパータリプトラの周辺に至るまでシンバルの種々の音  
 が鳴り続いた。すなわち、踊り手、踊りを教える者、語り手と道化師と装飾をなす者、  
 歌手と幻術師、祭祀を行う者、女性の扮装をする者と三叉戟を〔叩き〕鳴らす者、太  
 鼓の真ん中の窪みをたたく者と、五組の子ども<sup>(13)</sup>はまた、通りにおいて遊び、それ  
 ら全ての人々は、広い通りと狭い通りと、〔282a1〕十字路と全ての三叉路において、  
 各自の全ての行為によって、〔パータリプトラを〕荘厳した。

〔パータリプトラ〕市の四つの門にも、〔人々は〕施物を施し、諸々の功徳を積ん  
 だ。すなわち、食物を欲する人々に対しては食物を、衣を欲する人々に対しては衣を、

<sup>(9)</sup>Skt. の āttamanāḥ (p. 405.20) の語により補った。

<sup>(10)</sup>Skt. では avāptā mauryasya vaṃśasya parā vibhūtiḥ 「マウリヤの家系にとって、最高の繁栄が得  
 られた」(p. 405.22-23) となっている。

<sup>(11)</sup>Skt. の mama (p. 405.24) より補足。

<sup>(12)</sup>『伝』「先王之種有大名称。我今復能增長於法。而生此子。故遂立名以為法増。」(p. 108a7-9)、『経』「我  
 於今日 大生歡喜 我孔雀姓 名聞一切 宮人以法 由之增長 故名此児名達磨婆陀那」(p. 144a14-16)

<sup>(13)</sup>何を意味するのか、内容は不明である。原文は、byis pa lnga tshoms pa(P. 281b8; D. 228a4-5) で  
 ある。

香と数珠と塗香を欲する人々に対しては、香と数珠と塗香を、一對の布と天幕と財物を欲する人々に対しては、一對の布と天幕と財物を与えるのであり、諸々の歡喜の樂器を打ち鳴らし、頭にはゴマの油を塗るのである。

[以上の]日中に於いての如くに、三七・二十一昼夜の間<sup>(14)</sup>、盛大な誕生祭が催されると、[アショーカ王は、]おくるみを受持する二人の乳母と、洗濯する二人の乳母と、乳を与える二人の乳母と、遊び相手の二人の乳母との、すなわち八人の乳母に[王子を]ゆだねた。そうして、かの王子は、八人全ての乳母によって、彼女ら自身の仕事が十分になされて、養育されて後、医者達によって、ミルク、バター、サワーミルク、ヨーグルト、蜂蜜によって育てられはじめた<sup>(15)</sup>。

そこで、アショーカ王は、息子を見ることをとても楽しみにして、従者達に向かって、「どんな王子を見るのであろうか」と語った。

そこで、乳母達は[王子を]王に見せるために運んだ。王は[王子を]見た後で、<王子にどの様な名を付けようか>と考えて、

「この子は私が[282b1]法を理解した時に生まれたので、それ故、『法を増大する者』と名付けよう」と語って後、王は王子を受け取った。そうして、王は息子を見ると、喜びつつ語った。

「私の子どもに素晴らしく吉祥な眼が生じた。[その眼は]青い蓮華の如くであり、非常に大きい睫毛を有する。それらによって飾られた顔は、美しくなされており、満月<sup>(16)</sup>の如くである」[と]

<sup>(14)</sup>原文は、gsum pa nas bdun pa nas / nyin zhag nyi shu rtsag cig gi bar du (P. 282a4; D. 228a7) である。日時の記述について、類似する記述が Divy において見られるが、その箇所の記述は以下である。trīṇi saptakāny ekaviṃśatidivasāni vistareṇa jātasya jātimahaṃ kṛtvā ... (Divy p. 3.5-6) nyi ma bdun gsum nyi shu gcig tu btsas ston rgya cher byas nas ... (P. No. 1030, Khe 238b1-2; D. No. 1, Ka 253a3) 「三七・二十一日の間、一日も欠かすことなく、誕生の儀式をやり終えと、」(平岡聡「コーティールカルの餓鬼界遍歴物語 - 『ディヴィヤ・アヴァダーナ』第1章和訳 - 」, 『仏教学会紀要』4, 1996, p. 48)。

<sup>(15)</sup>同じ内容の文章は、Divy の他の章にも見られる。sudatto dārako 'ṣṭābhyo dhātrībhyo dattaḥ / dvābhyām aṃsadhātrībhyām / dvābhyām kṣīradhātrībhyām / dvābhyām maladhātrībhyām / dvābhyām krīḍanakābhyām dhātrībhym / so 'ṣṭābhir dhātrībhir unnīyate vardhate kṣīreṇa dadhnā navaṇītena sarpiṣā sarpīrmaṇḍena anyaiś ca uttaptottaptair upakaraṇaviśeṣair āśu vardhate hradastham iva paṃkajam / (p. 3.12-17)。

<sup>(16)</sup>Skt. では、sāmpūrṇacandra 「満月」(p. 406.2)であるが、Tib. では満月を sgra gcan kha las thar pa'i zla ba 「悪魔の口(月食)から解放された月」(P. 282b2-3; D. 228b4)と表現している。ここでは、

そこで、王は大臣達に訊ねた。「あなた方は、この様な眼を持つ者を知っているか」  
[と]

大臣達は答えた。

「陛下、全く見たことはありません」[と]

そこで、王は、そこにいる家来達に向かって、以下の様に述べた。

「山の王ヒマーラヤに、歳を経たバラモン達が集る」[と]

[王はそこに行く、]彼らに王子を見せて[訊ねた]

「あなた方は、また、この様な眼を持つ者を知りますか」[と]

[彼らバラモン達は答えた。]

「陛下、諸々の人趣の内にはこの様な眼を持つ者を知りません。そうではあります、陛下、山の王ヒマーラヤにおけるクナーラという名のかの鳥には、その様な眼があります」[と]<sup>(17)</sup>。

更に[彼らバラモン達は]述べる。

「山の王ヒマーラヤの岩山の頂上、[そこには]多くの花[が在り、]豊かな川が流れている。そこに、クナーラという名の鳥[が居る] [王子の眼は]その眼に似ている」[と]

そこで、王は、

「クナーラ鳥を直ぐに持って来い」と、命令した。

[その命令を]彼の上方一由旬までで、ヤクシャ達が聞き、また彼の下方一由旬までで、ナーガ達が聞いた。そこで、ヤクシャ達が、直ちに[283a1]クナーラ鳥を持って来た。そこで、王は、王子とクナーラ[という名の鳥]の眼を実に長い時間吟味したが、僅かな違いも知られなかった。

王は述べた。

「ああ、王子とクナーラ[鳥]の眼は、まさしく同様であるので、王子にクナーラという呼び名を付けるとしよう」と。

また、[或る者が]言った。

「かの王は眼を喜んで、その時、子どもをクナーラと[いう名で]呼んだ。以来、高

Skt. に従い、簡潔に「満月」とした。『伝』では「圓満月」(p. 108a13)、『経』では「秋満月」(p. 144a21)となっている。

<sup>(17)</sup>Skt. と漢訳二本では、王子の眼に似た眼を持つクナーラ鳥の存在を告げるのは、アショーカ王の大臣達であるが、Tib. では「歳を経たバラモン達」lor brten pa'i bram ze rnam (P. 282b4; D. 228b5)となっている。

貴なる衆生にして王の子である彼の名は、地上で非常によく知られている」[と]

それからしばらくして、王子が成長して後に、[王は]彼に対してカーンチャナマーラーという名の娘を[王子の]妃として呼び寄せ、与えた。

[また、王子は、]父の様々な仕事と様々な行為、すなわち、象の首に乗ること、馬に乗ること、戦車の扱い、弓の扱い、[象を御するための]鉄の鉤の扱い、槍の扱い、鉄矢の射法、投げ槍の投げ方、[車で]前進する方法、[車で]後進する方法、後進する方法、切る方法、裂く方法、遠射の方法、声で罵る方法、弱点を突く方法、外さずに射る方法、[的に]確実に射る方法、割る方法、拳法、歩行法、において熟達した。アショーカ王はこの(王子の)ために、三つの住処を作らせた。一つには冬期用の[住処]、二つには夏期用の[住処]、三つには雨期用の[住処]である<sup>(18)</sup>。その内、冬期用の[住処]とは、完全に暖かい[住処]である。夏期用の[住処]とは、完全に涼しい[住処]である。雨期用の[住処]とは、その両方を[283b1]有する。[すなわち、]それほど涼しくもなく、それほど暖かくもない[住処]である<sup>(19)</sup>。妃は三種である。上位の妃、中位の妃、下位の妃である。さて、王子は天女に等しき妃の内、高貴な微笑み・目もと・振る舞い・嬉嬉たる様子・舞踏・歌の鑑賞に秀でた者達と共に、美しい住処の上階に住み、カーンチャナマーラー妃と共に楽しみ遊んだ。

[それらのことを]享受した後、しばらくして、或る時、王はクナーラと共に、鶏園寺へ向かった。そこには、ヤシャスという名の、六神通をそなえた長老がいたが、彼は[王子を]観察した。観察し終わると、<クナーラの眼が遠からず、壊れることになる>と考えたので、彼(ヤシャス)は、王に[次の様に]述べた。

「どうして、王子は、自身の[なすべき]行為を、心掛けないのか<sup>(20)</sup>」[と]、そこで王は、クナーラに述べた。

「クナーラよ、サンガの長老が教示されることを何であれお伺いせよ」[と]、そこで、王子は長老の両足にひれ伏すと、[以下の様に]尋ねた。

<sup>(18)</sup> Divy 第1章のコーティーカルナ・アヴァダーナにおいても(p. 3.20-21) 長老が自身の息子のために夏期用・冬期用・雨期用の三種の住居を建てたことが述べられている。

<sup>(19)</sup> shin tu dro ba yang ma yin pa'o // 「それほど暖かくもない」(N. 257b7)の句は、P. と D. では欠落している。

<sup>(20)</sup> Skt. では、kimarthaṃ kunālaḥ svakarmanī na niyujyate (p. 406.23)となっており、Tib. でも、ci'i phyir gzhon nu rang gi las la ma sbyar (P. 283b5; D. 229b1)となっている。また、『経』でも「何故不令鳩那羅作其自業」(p. 144b12-13)となっており、Skt. と Tib. に一致するが、『伝』のみが、「何故不使駒那羅子常令聽法」(p. 108a24)とし、具体的に「法を聴聞すること」にヤシャス長老が言及したことになっている。

「長老よ、何なりと教示を与えて下さいませ」[と]

長老は[以下の様に]答えた。

「クナラよ、『眼は無常である』と、心において観察せよ」[と]

更に、[長老は]述べた。

「クナラよ。多くの衆生がそれに執着し、不利益を得る諸々の行為を為すところのその眼は、うつろい易く、千の苦しみを伴うものとして常に考察すべきである」[と]

彼は、その通りに修習し、心において観察をし、また、常に従事し、孤独を喜び、[284a1] 静けさを楽しんだ。彼(クナラ)はまた、王宮の孤独な場所に座り、眼に過失ありと考へ、処(感官)を無常等の形象でもって考察した<sup>(21)</sup>。

さて、ティシュヤラクシターという名の[アショーカの]第一の妃が、そこにやってきた。彼女は、一人座しているクナラを見たので、眼に染著して、[クナラの]身体を抱きしめて、言った。

「あなたの身体と結び付くことの、貪欲の火は力強く、森の火が力強く燃えることは、多くの[木々]が燃えるということである。王子よ、私と共に、快樂を享受しましょう<sup>(22)</sup>」[と。]

それを聞いたので、クナラは両手で耳を塞いで、[以下の様に]述べた。

「あなたは、その様な言葉を語るにふさわしくない。子どもにとっての母の様に、貴方は、私の母である。この様なことは、悪趣の道の入口なのだから。非法の貪欲を捨てよ」[と]

そこで、ティシュヤラクシターは言った。

「この場合、どんな罪過が認められようか。さらに、王子よ、先ず聞きなさい。例えば、太陽の威勢による熱に焼かれると、[人は]水を飲むが、身体を水で満たす時に、罪過があることは合理的でない様に。その様に、愛欲の火が大きく、[人が]甚だしく

<sup>(21)</sup>Skt. では、*caḥṣurādīny āyatanāny anityādibhir ākāraiḥ parikṣyate* / 「眼等の諸感官が無常等の形象でもって観察された。」(p. 407.5)となっている。

<sup>(22)</sup>Skt. では、*dr̥ṣṭvā tava idaṃ nayanābhirāmaṃ śrīmad vapur netrayugaṃ ca kāntaṃ / daṃdahyate me hr̥dayaṃ samantād dāvāgninā prajvalate va kakṣaḥ* // 「あなたのこの美しく魅力的な眼と、眼と対をなす美しく魅惑的な身体を見たので、森の火によって、乾いた樹が燃えるように、私の心は完全に焼き尽くされた。」(p. 407.9-12)となっており、内容的には一致する。

枯渇する時に、身体に触れることには、水の心地よさがある。そこからどんな非法が生じようか」[と]

クナーラは答えた。

「[そのことは、]私の名声をたかめず、非常に軽蔑され、後で、[284b1]後悔することになる。私の正しき行いをたかめず、その様に家系をおとしめることにもなり、高貴にはならず、貧しくなり、好ましくない言葉によって罰せられ、傷つけられる。非難されることはあっても、名声が高まることはなく、法もまた現われない」[と]

ティシュヤラクシターは言った。

「クナーラよ。その様であっても、汝が恐れるこの事は、人が知るから、名声が高まることはないのである。また、十分に孤独になって、人の集まりから離れているのだから[人には知られることはない]」[と]

更に[ティシュヤラクシターは]言う。

「私たち(二人)を見て語る者、すなわち、女性達や従者達は誰も居ない。だから私の言葉を聞け。『貪欲を持つ女性は孤独を捨てた場合、その大法を破壊する』と聞くことによって、名声を聞くのであろうか。容姿の調和がとれており、供養に値する、過失なきものとみて、その者に、美しい顔色と年齢とが調和がとれていることによって、[名声を聞くのである]」[と]

クナーラは言った。

「汝が『この場所にいても[人に]見られない』と言うのなら、先ず聞きなさい。今、燃焼する薪に住する火神(アグニ)によって、私が見られ、ブラフマンによっても見られ、インドラ達と水神(ヴァルナ)、月神(ソーマ)、ヤマ達によっても見られる。さらにまた、最高の神の住処(大宮殿)に住している、他の[神々]によって必ず見られる。愚かな汝は、私と親族の存在を見ず、自身をも見ない。[285a1]人は誰でも孤独であり、火へと向かう場合に、その人がどうして燃えないということがあろうか。慢心によって甘い果実に似た毒を食べる人は誰であれ、害を受けないことがあろうか。毒蛇によって苦しめられる誰であれ、傷つけられないことがあろうか。誰であれ一人で住していても、罪過を犯すのであり、汚れない人はいないのである」[と]

そこで、ティシュヤラクシターは言った。

「王子よ、先ず、あなたはその様に望んで住してはならない。彼はまた、時の門の要塞と様々な食物と<sup>(23)</sup>を求める場合に、貪欲の大海の水を渡り終えると、友人達と離れることになる。[逆に、]貪欲の故に誓戒を失えば、服を着て、その苦行によって、次のことを得る。[すなわち、]彼は、この世で幸福を手に入れるのである。このことに、どうして執着しないことがあるか」[と]

クナーラは[次の様に]言った。

「あなたによって、私は征服されないであろう。天女に似た女性<sup>(24)</sup>よ、そこ(女性)には、地獄の苦難があるから、[汝だけでなく]他の女性をも捨てるであろう」[と]

それ故、ティシュヤラクシターは自身の欲望の成り行きを得ることができなかったの  
で、怒って言った。

「実に、[私が]欲望に焦がされたのに、若し今、[汝が]私を望まないのならば、愚かな考えを有するあなたは遠からず、全てを失うことになる。眼が二つであることによって、汝は今、慢心している。遠からず、それら(両眼)が衰えるのを私たちは見ることになる<sup>(25)</sup>」[と]

クナーラは言った。

[285b1]「法が浄らかであるのならば、私は直ちに死ぬことになってもよい。聖者達に非難された生活は、私にはなされるべきでない。何故なら、諸々の天界と法が失われる生活が、一体何になるうか。智者により圧倒され、窮乏し、私には実に死がある」[と]

そこで、かのティシュヤラクシターは、クナーラについての欠点を探し求め続けた。

さて、アショーカ王は、北方のタクシャシラーの町の人々が反乱を始めた事を聞いて、王は自ら出発しようとした。

<sup>(23)</sup>dus kyi sgo'i rdzong dang pinda'i rigs 「時の門の要塞と様々な食べ物と」(P. 285a3; D. 230a7; N. 259a4) については、意味不明である。

<sup>(24)</sup>原文では、bud med dag 「女性達」(P. 285a6; D. 230b1)と複数になっているから、ティシュヤラクシターの侍女達とも考えられるが、先に妃が自分とクナーラだけしかこの場に居ないことを述べているので、単数で訳した。

<sup>(25)</sup>眼が失われることを予告する偈文に相当する箇所は Skt. にも漢訳二本にも見あたらない。

そこで、大臣たちは、言った。

「陛下、王子をお送り下さいますように。彼が鎮圧するでしょう」[と]

そこで、王はクナーラを呼んで後、言った。

「クナーラよ、タクシャシラーの町を鎮圧に行くか」[と]

クナーラは言った。

「陛下、[私が]直ちに参ります」[と]

そこで、王は心に浄心を持つ息子というものの思いを知って愛着で満たされたが、[出発の]時期に適していたので、出発の機会を指示した。

そこで、アショーカ王は町を飾り、道路を綺麗に[掃除]して、老人と病人と貧しい人々とを[王]自身の道から排除し[遠ざけ]て、王子と共に戦車に乗って、パーティプトラを出発して、連れて行って、戻りながら、クナーラを正面から抱きしめて、眼をじっと見つめて、泣いて言った。

「高貴な鳥であるクナーラに似て、眼は大きく、[286a1] 青い蓮華に等しく、これを見る者には、光輝があり、喜びがあり、災厄が離れる」[と]

さて、ある占術師であるバラモンがクナーラの眼が長く保たれずに失われる<sup>(26)</sup>であろうと観察した。アショーカ王がその(息子の)両眼に非常に執著しているのを、その占術師は知って[次の様に]述べた。

「王子の眼は浄らかで、王も眼に執著し、吉祥で浄らかで楽しみに相応する。[その眼が]長く保たず、失われるであろう事を[私は]知る。天界の様に喜びを有するこの都市は、王子を見て、渴愛が生じるが、眼が失われると、諸々の執著有る[人々]は、諸々の憂いによって焼かれる」[と]

さて、クナーラは次第にタクシャシラーの町に近付いてきた。[それを、]タクシャシラーの町の人は聞いたので、二由旬と半分の間を、町を飾り道を美しくし、バターでいっぱいになった器をもって、着飾って、出迎えた。

また、[誰かが]述べる。

「タクシャシラーの住人は、[これを]聞いて、家でいっぱいの壺等の、供物を携えて出迎えに行って後に、かの王に対して十分に礼拝した」[と]

[タクシャシラーの住人はクナーラ王子を]出迎えて後、合掌をなしつつ[以下の様に]述べた。

<sup>(26)</sup>jig par 「失われる」という語は P. (P. 286a2) のみに存在する。

「私達は王子に対して反逆を致しておりません。アショーカ王に対して[反逆を致しても]おりません。そうではなくて、非道な役人がやってきて、私達に対して[286b1]侮辱的な行為をなさるのです」[と]

そうして、クナーラは大いなる尊敬を伴ってタクシャシラーの町に入った。

さて、アショーカ王に、或る大いなる病気が生じた。彼の口から、汚物が流れ出し、全ての毛穴から不浄な物が流れ出した。それでも、[誰も]治療することができなかった。それ故、王は、

「クナーラを呼べ。彼に王位を譲ることにする。私はこれ以上生きて何になろう」と言った。

それを聞いたので、ティシュヤラクシターは[以下の様に]考えた。<もし、[王が]クナーラに王権を譲るならば、私の命は無い>[と]考えたので、彼女は[次の様に]言った。

「陛下、私が貴方[の病気]を治します。しかし、医師達が[部屋の]中に入ってくることを禁じて下さい」[と]

そこで、[アショーカ]王は、医者達が入って来るのを禁じた。

さて、ティシュヤラクシターは、医者達に[次の様に]命じた。

「もし、男であれ、女であれ、この[王の]様な病気にかかっているならば、その者を、汝等は私に見せよ」[と]

さて、或る隠者<sup>(27)</sup>が、その様な病気にかかった。[そこで、]彼の妻が医者に、その病気を報告した。すると医者は[次の様に]述べた。

「その患者を、連れてきなさい。[私が]病気を診て、薬を処方しよう」[と]

そこで、彼が連れて来られて、医者のもとにやって来た。すると、医者はティシュヤラクシターのもとに[彼を]運んだ。ティシュヤラクシターはまた、全く人気の無い場所で、その者を殺してから<sup>(28)</sup>調べた。[すると、]彼の消化の場所すなわち腸の中に、一匹の大きな虫が現われた。それが上の方に行くと、その者の汚物が上に生じた。下に[287a1]行った時には、下に[汚物が]生じた。さて、そこで、胡椒をすり潰

<sup>(27)</sup>Tib. では、ri khrod pa「隠者」(P. 286b6; D. 231b1)あるいは「山に住む行者」となっているが、Skt. には、ābhīra「牛飼い」(p. 409.9)となっている。尚、漢訳では、「一男」(『伝』p. 108c8)、「一人」(『経』p. 145a18)となっており、素性を明示していない。ここでは、Tib. に従い「隠者」と訳す。

<sup>(28)</sup>Skt. では、この位置に、kuṣṣiṃ pāṭayitvā paśyati ca tasya pakvāśayasthānam「腹を開いて後、その男の腹の中の状態を見た」(p. 409.15)という文章が入る。

して振り撒いたが、死ななかった。同じ様に、黒胡椒、ショウガ、塩<sup>(29)</sup>等を飲ませるように与えた [ が、死ななかった ] そうして、ニンニクを振りかけると、 [ 虫は、それに ] 触れるだけで死に、排泄物の道から [ 外に ] 出た。彼女はこの処方をも王に説明した。

「陛下、ニンニクをお食べください。そうすればあなたは回復するでしょう」 [ と ]  
王は答えた。

「妃よ、私はクシャトリヤである。頭頂から灌頂を受けているのに、どうしてニンニクを食べられようか」 [ と ]

妃は言った。

「陛下、これは御命の為の薬なのですから。食べるべきです」 [ と ]

そこで、王が [ ニンニクを ] 食べたので、その [ 腹の中の ] 虫は死んで、排泄物の道から出た。王は回復した後、彼<sup>(30)</sup>はティシュヤラクシターに最上の布施を与えようとした。

[ 王は尋ねた。 ]

「汝に対する布施は、どの様なものが与えられるべきか」 [ と ]

彼女は答えた。

「私に七日間、王位を与えて下さい」 [ と ]

[ 王は尋ねた。 ]

「しかし、私はどうなるのか」 [ と ]

妃は答えた。

「七日を過ぎれば、陛下御自身が [ 再び ] 王となって下さい」 [ と ]

そこでティシュヤラクシターに七日間の王位が与えられた。 [ テシュヤラクシターに ] 以下のような思いが浮かんだ。 <今こそ、私はクナーラに対し恨みを晴らそう> [ と ] 彼女によって、「タクシャシラーの住人達はクナーラの眼を壊せ」という偽りの手紙が [ 次の様に ] 書かれた。

また、かのアショーカ王は、命令した。

「非常に勇敢で、武力と、障害無く他を圧倒する才能によって [ 287b1 ] 征服する王は、四つの海と、地上の王の頭頂の冠を伴って、坐処と足場とを征服する。憂いを離れる故に、憂い無き者 (アショーカ) である。マガダの都市からパータリプトラとタクシャシラーに住するまでの間、常に功德ある行為をなすことによって、饒益する。

<sup>(29)</sup> 漢訳二本、Skt. は、lan tshwa 「塩」 ( P. 287a1; D. 231b3 ) にあたる語を欠く。

<sup>(30)</sup> Skt. では、彼 (アショーカ王) を形容する parituṣṭena 「満足して」 ( p. 409.24-25 ) の語が見られる。

第三番目の集落である都市（タクシャシラー）の楼閣に住する人々について、都市の人々は「これから」知る通りに、その通りに了解せよ。

今、私の息子と称される、偽りの柔和な行為に長けた敵が造作した、まやかしの示現によって、「人々は」合掌する。種族の火種となったかのクナールは、偽りの行いにより、私がいなくなると、注意を解き、害をなし、後宮を眺めて、考慮無く行い、慈悲がなく、後生を怖れない為に、父「王」の妃を見て、その瞬間に、事件が始まった。姿形によって自惚れ、母に慢心を増長させる、世間的最高の教えに反抗する二つの眼を速やかに排除して、困窮した状態にせよ。非常に破れた服を着せて、妻と共に「国の」外に追い出せ。二つの眼で強慢になったるそれを無くせ。また、それ（二つの眼）が人々に晒されよ。その罰の手紙も捨てるな。為したことを憶えていないことの不幸を聞いても、更に「288a1」私の心を揺らすこと勿れ。私は汝らに、教えを打ち立てた。「私の」下したこの命令を汝らは実行せよ」「と」  
更に述べる。

「アショーカ王は、恐ろしく、武力を有する。命令の通りに、タクシャシラーの住人達は為せ。王に対して害である、クナールというもの、「彼の」二つの眼を速やかに排除せよ<sup>(31)</sup>」「と」

以上の様に、かのティシュヤラクシターは、命令書を書いて後、＜アショーカ王の歯型により、手紙に封印が為されなければならない＞と考えたので、そこで、ティシュヤラクシターは、その手紙を王が眠っている間に、歯型で封印をなそうと考えて、王の近くに行ったところ、王は驚いて目を覚ました。

妃は尋ねた。

「陛下、どうなされました」「と」

王は答えた。

「妃よ、私は良からぬ夢を見た。二羽のハゲタカがクナールの眼を引き出そうとしているのを見たのだ」「と」

妃は言った。

「王子は元気ですが、...」「と」

「以前と」同じく、王は驚いてと目を覚まして言った。

<sup>(31)</sup>Skt. では、rājā hy aśoko balavān pracanḍa ājñāpayat takṣaśilājanam hi / uddhāryatām locanam asya śātror mauryasya vaṃśasya kalaṅka eṣaḥ // 「実に、武力を持てる恐るべき王であるアショーカは、タクシャシラーの人々に命じた。『マウリヤの王統に対して中傷を有するもの、その敵の眼を抉れ』」(p. 410.3-5)となっている。

「妃よ、私は〔良からぬ〕夢を見たのだ」〔と〕  
 ティシュヤラクシターは尋ねた。  
 「どの様な夢ですか」〔と〕  
 王は説明した。  
 「クナーラが髪と爪を長く保って、汚れた衣服<sup>(32)</sup>を着ているのを〔私は〕見たのだ」  
 〔と〕  
 妃は言った。  
 「王子は元気ですが、...」〔と〕  
 しばらくして、王が眠っている間に、ティシュヤラクシターは、かの手紙に〔王の〕  
 歯型により封印をなして、タクシャシラーに送った。  
 また王は、眠っている間に、自らの歯が抜け落ちる〔288b1〕夢を見た。そこで王  
 は、まさにかの夜が過ぎたときに、占術師達を呼んで、夢を述べて後、  
 「これらを説明せよ」<sup>(33)</sup>と命じた。  
 占術師達は〔王に〕説明した。  
 「陛下、この様な前兆を見る人、その人は、子どもの眼が無くなるのを見ることでは  
 しょう」〔と〕  
 また、〔或る占術師が〕言う。

「歯が壊れ、夢の中で〔歯が〕落ちる人は、子どもの眼が壊れ、〔眼が〕壊れた子  
 どもは、その〔夢を見た〕人によって見られることでありましょう」〔と〕

このことを聞いたので、アショーカ王は座より立ち上がって、四方の神々に対して懇  
 願をし始めた。

〔アショーカ王は次の様に〕言った。

「仏陀と法と、集まりの最上のものであるサンガを浄信する神である者と、また、  
 世間における最上の仙人にして苦行者である者は、私の息子を苦窮から護って下  
 さらんことを」〔と〕

その手紙はまた、やがてタクシャシラーに達した。さて、彼等タクシャシラーの住  
 人達は、その手紙を見たが、〔彼等は〕クナーラの広大な徳によって歓喜していたの

<sup>(32)</sup>gos dri ma can「汚れた衣服」(P. 288a7; D. 232b2)の代わりに、Skt. ではśmaśruṃ「鬚髻」(p. 409.14-15)となっている。

<sup>(33)</sup>Skt. では、kīḍṣā eṣāṃ svapnānāṃ vipāka「これらの夢にはどの様な結果が存在するのか」(p. 409.19)となる。

で、[その手紙に対して]喜ばずに、それ(手紙)を[クナーラに]知らせることができなかつた。

[町の人々は]長い間、よく考えてから、<恐ろしく、性質悪しき王は、息子をも許すことがないのに、どうして、我々を許すことがあろうか>[と、考えた]。また、[或る者は]述べる。

「牟尼であり、寂靜な性質を有しており、全ての生き物の利益を[289a1]望む、クナーラに対しても、憎悪する時に、我々に対して、どうして[憎悪を]生じないことがあろうか」[と]

そこで、彼ら、町に住する多くの人々は、その手紙を王子に示した。すると、王子は父の手紙を押し戴き、書記官に[次の様に]命じた<sup>(34)</sup>。

「書記官よ、汝等は、王によってここに何が書かれているのか。手紙を読み、『アショーカ自身が書いた』というところまでだ<sup>(35)</sup>」[と]

そこで、[書記官は]手紙を読むと。眼に涙を浮かべて、取り乱して、手から手紙を落とした。二人目の書記官が[手紙を]受け取ると、彼も取り乱して、同じく、手から手紙を落とした。同様に、多くの書記官達が、[手紙を]受け取って、手紙の内容を知ったが、クナーラの功德を思い起こしたので、<ああ、これは何故なのか>と考えて、手紙を落としたのである。

そこで、王子は、彼等(書記官達)の振る舞いを見たので、[次の様に]言った。

「鹿[の眼]は、王子の眼に似ており、顔は蓮の花弁に似る。「蓮なり」と[人々が]賞賛するところの、私は命終しておらず。神が[その者を]見るときに喜ぶところの、ティシュヤラクシターという名の彼女は、どの様な苦惱・病気によって死ぬことがあるのか。[いや、ない。]美しき眼は、世間に知られて浄らかで、北の都市<sup>(36)</sup>には安楽と富貴が見られる。何故に、涙でもって眼を満たし、心を乱すのか。人々のこの様な嘆き声は何故か」[と]

そこで、[クナーラは言った]

「先ず、届いた手紙を宮室に持って来い。そこに[289b1]何が書いてあるのかを私

<sup>(34)</sup>D. における *yi ge pa la smras pa* (D. 233a1) の句が、P. と N. には欠けている (P. 289a2; N. 262a4)。

<sup>(35)</sup>原文は、*rgyal po mya ngan med rang nyid kyis bris so zhes bya ba'i bar du'o* // (P. 289a2-3; D. 233a1-2) 後にも、同じ記述が見られる (P. 289b1-2; D. 233a5-6) 命令書の末尾に添えられる署名のことだと考えられる。

<sup>(36)</sup>これまでの文脈からクナーラが赴任した都市であるタクシャシラーのことであると推測できる。

自身が読もう」[と]

王子は自ら、手紙を読むと、アショーカ王が自ら記した、というところまで、さらに詳しく [ 読んだ ]<sup>(37)</sup>。

そうして、王子は手紙を読むと、ヤシャス長老が [ かつて ] 語ったことを思い出した。  
 < ヤシャス長老は『眼は無常なり』と巧みに語られた > [と]

そこで、王子は言った。

「汝らの内で、誰か、怖れずに、私の眼を取り出すことを望まぬか。そのことが、為されなければならない。」

彼らの内で、誰も望まなかった。そこで、チャンダーラ達と呼ばれ、クナーラは、  
 「眼をえぐれ」と命じた。

彼ら ( チャンダーラ達 ) は、合掌して、[ 次の様に ] 言った。

「我々には、できません。何故なら、

月の威容を有する顔から、[ 眼を ] 抜き出す者、その者が、月に似たる顔から汝の  
 眼を抜き出すのです<sup>(38)</sup>」[と]

それ故、王子は、タクシャシラーの住人達に、

「福樂を欲する者は、ダルマラージカーのあるところに行け」と、鐘を鳴らし、宣告した。

さて、ダルマラージカーに、灯明の輪が [ 施 ] されて、二日間、比丘たちは、食事と飲物により、供養されて、花の天蓋がととのえられた。その様になして後、ダルマラージカーのあるところから出発すると、大衆に取り囲まれて、[ 何処か ] 別の、平らな岩のあるところに行き、到着すると、そこに坐って、金の箱を手に取り、[ 290a1 ] 述べた。

「[ これを ] 望む者、彼は、この金の箱を手に入れるときに、私の眼をえぐれ」と。  
 [ しかし、 ] 全ての人は、誰も [ それを ] 望まなかった<sup>(39)</sup>。さて、アショーカ王が夢

<sup>(37)</sup>原文は、rgyal po a-śo-ka rang nyid kyis bris so zhes bya ba'i bar du rgyas par ro // ( P. 289b1-2; D. 233a6-7 ) であり、前に見た文章と『アショーカ自身が書いた』という署名の記述までは同じである。

<sup>(38)</sup>この偈は、Skt. では、yo hi candramasaḥ kāntiṃ mohād abhyuddharet naraḥ / sa candrasadr̥śād vaktrāt tava netre samuddharet // 「愚かさの故に、月から輝きを奪おうとする者は、月に似たあなたの顔から両眼を奪うことが出来るでしょうけれども」( p. 411.10-11 ) となっており、Tib. と逐語的にほぼ一致する。Skt. の方が意味は明瞭である。漢訳では、『経』には同様の偈がある ( p. 145c19-20 ) が、『伝』には「真陀羅不肯而言。寧可壞我目。云何当壞如此之眼。」( p. 109a16-17 ) とあり、『伝』のみが一致しない。

<sup>(39)</sup>「そこに坐って、金の箱を手に取り...」以降の部分は、Tib. と Skt. とが文脈的に一致するが、文章の内容は異なっている。Skt. の相当箇所では、tataḥ kumāreṇa makutaṃ dattaṃ / anayā dakṣiṇayā

で、頭の禿げた嫉妬深き二人の男<sup>(40)</sup>が王子の眼をえぐるのを見た様に、その様に、長い時が経って、[ その同じ夢を ] 見たので、王子は言った。

「おい、住人達よ、[ 或る ] 男がやってくる。この者達が、私の眼を抉るであろう」[ と ]  
王子は、その二人の男を呼んで、[ 以下の様に ] 頼んだ。

「汝は、私の眼を抉ることを望むか」[ と ]

二人の男は答えた。

「もし、あなたが望めば、頭も割ることができるのに、水の泡沫のごとき二つの眼は言うまでもない」[ と ]<sup>(41)</sup>。

そこで、王子は座から立ち上がり、合掌をなしてから、全ての人々に耐え忍ぶ様に求めた。

「私は無邪気であったので、満ち足りていた。また、権力は強大であった。あるいはまた、不適當なことをなした。そのことは、幸福を害することであり、非常

utpāṭayata iti / tasya tu karmanā avaśyaṃ vipaktavyaṃ 「そこで、クナラは宝冠を [ 彼等に ] 与えて、『この報酬により、汝等は [ 私の眼を ] 抉れ』と [ 述べた ]。そして、彼の [ 過去の ] 業が必然的に結実した」(p. 411.12-13) とある。この tasya tu karmanā avaśyaṃ vipaktavyaṃ という句は難解であり、Strong 氏は but they protested, saying: “Such an act will inevitably result in bad karma.” (p. 276.19-21) と訳し、人々がクナラの命令に反対して述べた言葉として解釈している。定方氏は「ここで、かれの前世の業の報いがいやおうなく発現することとなった」(p. 117) と訳す。これは、漢訳の『伝』にある「業縁応熟自然有人面十八醜来求挑眼」(p. 109a18-19) という文脈を踏まえての訳であろう。この Skt. の訳に際しては、定方氏のを参考にした。

漢訳では、『経』がクナラによる「眼を抉れ」という命令の後、直ぐに悪相を持つ男が登場する (p. 145c22) のに対して、『伝』は「雇真陀羅以挑己眼。猶故不肯。業縁応熟自然有人面十八醜来求挑眼。」(p. 109a18-19) となっており、Tib. における thams cad du 'ga' yang spro bar ma gyur to 「全ての人は、[ それを ] 望まなかった」(P. 290a1; D. 233b3) という箇所と、Skt. における「彼の [ 過去の ] 業が必然的に結実した」という箇所との両方の内容を含んでいる。また、クナラが眼を抉る報酬として与える物を、漢訳と比べると、Tib. は『伝』の「於是用一宝篋価直十万両金。雇真陀羅以挑己眼」(p. 109a17-18) と類似し、Skt. は『経』の「是時鳩那羅即脱宝冠語旃陀羅言」(p. 145c21) と類似する。

<sup>(40)</sup>原文は、skyes bu spyi gcer mig ser ba gnyis (P. 290a2; D. 233b4) である。前出の、アショーカ王が見た夢の記述においては、bya rgod gnyis 「二羽のハゲタカ」(P. 288a5; D. 232b1) となっており、この記述と一致しない。

<sup>(41)</sup>以上の Tib. におけるクナラの眼を抉ることになった二人の男の話 (P. 290a1-4; D. 233b3-5) は Skt. と一致しない。Skt. では以下の様になる。puruṣo hi vikṛtarūpo aṣṭadaśabhir daurvarṇikaiḥ samanvāgato 'bhyāgataḥ / sa kathayati / aham utpāṭayisyāmi iti / yāvat kunālasya samīpaṃ nītaḥ / 「その時、容姿が醜く、十八の悪相を具えた男がやってきた。その男は言った。『私が [ 王子の眼を ] 抉りましょう』と。そうして、[ 男は ] クナラの側に連れて来られた」(p. 411.13-15)

に苦しいことである。[しかし、汝らは]私への憐愍によって、耐え忍ぶことがふさわしい」[と]

更にまた、

「諸々の容色を見たとしても、これ[ら]は、最後のものとなったのだ。クナーラ王子を害する者を汝らは許すのだ」[と]

その時、王子は長老の<sup>(42)</sup>語を現観して、かの語を思念しつつ、[以下の様に]述べた。

「この(眼の)災難を知ったので、『クナーラよ、眼の本性は[290b1]無常であると正しく見よ』<sup>(43)</sup>と、かの真実を語る者(長老)は語った。彼は、私にとっての善友<sup>(44)</sup>であり、安楽・利益を望んでいる。この法を教示するのは災難を取り除く者である<sup>(45)</sup>。[かの長老は]『眼は]無常なるが故に、それは、常ならず[という様に]、師の教えに基づき、汝は心を集中せよ』[と教示する]。これらの実体(両眼)<sup>(46)</sup>は、自性がゆらいでいる故に、今、汝が[眼を]害することを私は怖れない<sup>(47)</sup>。王が望むように、汝は眼を抉るべし。無常等のもの(肉眼)によ

<sup>(42)</sup>Tib. では、gnas brtan gyi「長老の」(P. 290a8; D. 233b8)と、単数であるが、Skt. では、sthavirāṇām「長老達の」(p. 411.16)と、複数になっている。漢訳では、「上座夜奢」『伝』(p. 109a20)「大徳耶舎」『経』(p. 145c23-24)という様に、共に、yaśas 長老の名を挙げる。

<sup>(43)</sup>長老の述べたこの内容は、Skt. では paśya anityam idaṃ sarvaṃ na asti kaścid dhruve sthitaḥ「永久に存在する如何なるものも無く、この全ては無常であると見よ」(p. 411.19)であり、Tib. では、mig gi bdag nyid ku-na-la // mi rtag yang dag ltos shig ces (P. 290a8-b1; D. 234a1)となっている。

<sup>(44)</sup>Tib. では、dge ba'i bshes (P. 290b1; D. 234a1) 漢訳の内、『経』では「我善知識」(p. 145c26)である。

<sup>(45)</sup>「教示されたこの法は、災難を取り除くものなのである」とも訳せる。

<sup>(46)</sup>Tib. の dngos po 'di dag「これら実体」(P. 290b2; D. 234a2)は複数ということから考えて、Skt. の netradvayasya「両眼」(p. 411.24)を指すと考えられる。

<sup>(47)</sup>クナーラの語る内容の内、ここまでが Skt. とあまり一致しない。Skt. の相当箇所は以下である。

kalyāṇamitrās te mahyaṃ sukhakāmā hitaiṣiṇaḥ / yair ayaṃ deśito dharmo vītakleśair mahātmabhiḥ // anityatāṃ saṃparipaśyato me gurūpadeśāt manasi prakurvataḥ / utpātane ahaṃ na bibhemi saumya netradvayasya asthiratāṃ hi paśye // 「この教えを説き示した、煩惱を除いた偉大な者達である彼等(真実を語る者達)は、私の為に安楽を望み、利益を願う善友である。私は、師の教示に専心し、無常なる性質を完全に知るので、友よ、[眼を]抉られる時にも、私は恐怖しない。何故なら、二つの眼が無常であることを観ずるからである。」(p. 411.20-25)

て、無漏なる真の眼を私は得る<sup>(48)</sup>」[と]

それから、クナラはその[二人の]男に言った。

「おい、お前、それ故、先ず、私の一方の眼を抉って私の掌に置け」[と]

そこで、その男はクナラの眼を抉り始めた。それ故、百千の衆生達が嘆き始めた。

「ああ、苦しき哉。

無垢なる光を有する月が、今、虚空から落ちた。浄らかな蓮華の池から、吉祥なる蓮華が刈り取られる」[と]

それから、百千の衆生達が泣いている時に、その男は、クナラの一方向の眼を抉って掌に置いた。

そこで王子は、その眼を受け取り、[その眼を]示して、言った。

「大種の力と業因により、これ(眼)が生じたが、[今は]生命無く、生きず、虚であり、人間の命を離れている<sup>(49)</sup>。肉の塊よ、汝は以前の様に、姿形を、今、どうして見ないのか。無知なる者は、汝(眼)を、自己[のもの]として頼る。その者は惑わされていて、[291a1]それ故、非難される。[仮和合のものは<sup>(50)</sup>]泡沫の様であり、水泡に似ている。[また、]非常に掴み難く、害をなすものであり<sup>(51)</sup>、依他である。その様に、常に注意しながら見て、その様にして、更に[眼を]苦と見ない」[と]

その様に考察した彼(クナラ)が、全ての事物を無常であると知って、預流果を得たことを大衆は知った。<sup>(52)</sup>

<sup>(48)</sup>Skt. では *grhītasāraṃ cakṣur me hy anityādibhir āśrayaiḥ* // 「無常等のものである身体によって、私には、本質を得たる眼が存在する」(p. 411.27)となっている。相当箇所の Tib. は *mi rtag sogs kyis zag med pa'i* // *snying po'i mig ni nga len to* // (P. 290b3-4; D. 234a2) であり、*zag med pa'i* 「無漏なる」という Skt. にはない語が介在する。

<sup>(49)</sup>Tib. における原文は、*'byung ba chen po'i mthu dang ni* // *las kyī rgyu las 'di byung ste* // *srog med 'tsho ba med stong pa* // *mi yi srog gi rnam sbangs pa'o* // (P. 290b7-8; D. 234a5) であり、Skt. には欠けている。

<sup>(50)</sup>Tib. には欠けている Skt. の語 *sāmagrajaṃ* (CN p. 412.11) または *sāmagryakaṃ* (Mukhopadhyaya ed. p. 115.7) 「和合より成るもの」という語によって補った。

<sup>(51)</sup>この *gnod byed* (P. 291a1; D. 234a6) という句は Skt. に欠けている。

<sup>(52)</sup>Skt. ではこの文までが、*evam anuvicintayatā tena sarvabhāveṣv anityatām / śrotāpattiphalaṃ prāptaṃ janakāyasya paśyataḥ* // (p. 412.15-16) となっており、偈文の形をとるが、Tib. (P. 291a2-3; D. 234a6-7) と漢訳二本とは散文の形をとる。

そこで、王子は真理を知見して<sup>(53)</sup>、その男に言った。

「恐れずに、望み通りに<sup>(54)</sup>二番目の眼をも抉り出せ」[と]

そこで、その男は二番目の眼も抉ってから、クナーラの掌に置いた。

そこで、クナーラの肉体の眼が取り除かれたが、法の眼<sup>(55)</sup>が清浄になったので、[クナーラは次の様に]言った。

「私の肉体の眼は抉り出されても、そうであっても、この非常に得難き、淨らかで、非難されることのない慧眼<sup>(56)</sup>が、私に得られた。王が自身の息子の称号を捨て去っても<sup>(57)</sup>、法の王の息子となり、大自在者となる。支配者の位から退くといえども、愁憂の苦を捨てることにより、愁憂を滅した法の支配者の位を得る」[と]

そこで、クナーラの眼が抉り出されるのを見て、大衆は、一斉に嘆き声を挙げて、或る者は諸々の衣服や装飾品を引き裂き、或る者は大地をのたうち回り<sup>(58)</sup>、或る者は杖と[291b1]すりこぎ棒とを手に携えて、[クナーラの眼を抉った、]かの二人の男達を傷付けようとした。他の者達は、王を非難した。

「ああ、恐ろしき力を有する王よ、ああ、鈍才の王よ。ああ、傲慢なる支配をする王においては、一人息子をも、このような状態にしたのだ」と。

その様な様々な[王の悪しき]性質を語りながら、[人々は]都市に戻るのだった<sup>(59)</sup>。

<sup>(53)</sup>Tib. では、bden pa mthong ba dang (P. 291a3; D. 234a7) Skt. では dr̥ṣṭasatyas (p. 412.16) となっている。

<sup>(54)</sup>Tib. には、ji ltar mngon par 'dod par 「望み通りに」(P. 291a3-4; D. 234a7) という Skt. と漢訳には見られない句が挿入される。誰の望みなのかは明記されない。

<sup>(55)</sup>ここでの「法の眼」は Tib. では chos kyi mig (P. 291a4; D. 234b1) Skt. では prajñācakṣuṣi (p. 412.20) と表現される。漢訳では、『伝』が「法眼」(p. 109b8) 『経』が「慧眼」(p. 146a17) とし、『伝』は Tib. に、『経』は Skt. に一致する。

<sup>(56)</sup>この箇所では、Tib. では shes rab mig (P. 291a5; D. 234b1) Skt. では prajñācakṣur (p. 412.22) と表現される。漢訳では、『伝』(p. 109b9)・『経』(p. 146a18) 共に「慧眼」とする。

<sup>(57)</sup>この句は Tib. では、rgyal pos rang gi bu yi ni // brtags pa spangs par gyur kyang ni // (P. 291a5-6; D. 234b1-2) である。Skt. では、parityakto nṛpatinā yady ahaṃ putrasaṃjñayā 「私が、[王の]息子の称号を、王によって奪われたとしても」(p. 412.23) となっている。

<sup>(58)</sup>原文は、la la ni sa la 'gro zhing ldog par byed (P. 291a8; D. 234b3) 人々が大地に伏して嘆く様の描写である。

<sup>(59)</sup>原文である grong khyer du zhugs par gyur to (P. 291b3; D. 234b5) を直訳すると「都市に入る」となる。眼を抉られることが行われたのが都市の郊外であったことを示して、この様に記述されたのである

さて、クナラはこのことがアショーカ王の命令ではなく、そうではなくて、ティシュヤラクスターのものであると聞いた。[そのことを]聞いたので、[クナラは以下の様に]述べた。

「彼女(ティシュヤラクスター)によって、この企てがもたらされたことにより、それを甘受して、自己の目的が達成された。ティシュヤという名の者が、長い間、安楽にあり、王妃の寿命と力とが守られますように」[と]

その後、カーンチャナマーラーはクナラの眼が抉り取られたということを知った。そして、[それを]聞いたので、夫に対する愛情の故に<sup>(60)</sup>、クナラの近くに行くと、取り巻いている人々をかき分けて、クナラの眼が抉られ、身体が血にまみれているのを見た。そして、[彼女は]気を失って、地に倒れた。そこで、[人々は]水をかけ、[彼女を]抱き起こした。それから、[彼女は]何とか意識を取り戻すと、声を出して、泣きながら言った。

「あなたの眼は愛らしく、私が[それを]見たときには、非常に満足した<sup>(61)</sup>。それ(眼)が、今見るときには、恐怖を産みだし、心の憂いを残り無く引き出す」[と]

そこで、クナラは妻を憐れんで言った。

う。「都市に戻る」と訳すのが文脈上適当であると考えられる。また、Skt.、漢訳ともに、相当箇所を欠く。インドの都市の構造については、山崎元一『古代インド社会の研究 - 社会の構造と庶民・下層民 -』、刀水書房、1987、pp. 159-167を参照した。

<sup>(60)</sup>Tib. で、khyo la brtse bas「夫に対する愛情の故に」(P. 291b5; D. 234b6)となっている箇所にあたるのは、Skt. の bhartṛtayā (p. 413.4) という語であるが、訳しづらい。岩本訳では、「大急ぎで」(p. 371)、定方訳では、「逸る妻の心で」(p. 122)、Strong 訳では「kañcanamālā, who was devoted to her husband」(p. 278.31)となっているのが、この語にあたる訳である。また、漢訳では、『経』の「以念夫故...」(p. 146a27)がこの語の訳と考えられる。

<sup>(61)</sup>この偈文は、Skt. においては以下の様になっている。

netrāṇi kāntāni manoharāṇi ye māṃ nirikṣaṃ janayanti tuṣṭim / te me vipannā hy anirikṣaṇīyās tyajanti me prāṇasamāḥ śarīram // 「私を見て満足を生じた、美しく愛らしき両眼は、奪い取られ、私を見ずして、私の命に等しき[眼]は、私の身体を見捨てた」(p. 413.8-11)

Tib. では、nga yis bltas na「私が[それを]見たとき」(P. 291b7-8; D. 234b7)となっているのに対し、Skt. では、māṃ nirikṣaṃ「私を見て...」となっており、主語を異にしている。また、漢訳は、「妙好清浄眼毀壞乃如此」(『伝』p. 109b17)・「眼光明可愛 昔見生歡喜 今見其離身 心生大瞋惱」(『経』p. 146b1-2)となっており、内容的には『経』が Tib. に近い。

[ 292a1 ] 「悲しみに執着することは、[ 汝にとって ] ふさわしくない。泣いて何になるろうか。何故かといえば、今、[ 過去世において ] 自身が為した行為の果報を、此の世で受けたのだから<sup>(62)</sup>。この世界が、業から成っていることを知り、衆生は苦から成ると知って、愛別離苦に執着してはならない。それ故、親愛なる者よ、[ 汝は ] 涙を流すな」[ と ]

そして、[ クナーラは ] < 眼を抉られた今、私が [ ここに居て ] 何になるろうか > [ と考えて、 ] 家族のもとへ出発した。

[ クナーラは妻に言った。 ]

「汝も、苦の分を有するものとなるな」[ と ]

[ しかし、 ] カーンチャナマーラーは言った。

「あなた、吉祥なる妃というものが、愛情に基づき、[ 夫に ] 随い行くことは不思議ではありません。時として、衰退する場合に [ も ]、[ 夫に ] 随い行くのです。その女性は、人の内で、神に等しいのです」[ と ]

そこで、クナーラは妻を伴って都市より去った。

(未完)

キーワード Ku-na-la'i rtogs pa brjod pa, Dvyāvadāna, Aśoka, Kunāla

---

<sup>(62)</sup>この文は、Tib. ( P. 292a1; D. 235a1 ) と Skt. ( p. 413.13 ) と 『経』 ( p. 146b.2-3 ) において、いずれも散文となっているのに対し、『伝』においては、「自作此悪業 今日自受之」( p. 109b19 ) と、偈文の中に含まれている。また、ここで、眼を抉られた原因が過去世になした業にあると言及されるが、その過去世の業の内容までクナーラが知っていたか否かは不明である。